

会 議 録

会 議 の 名 称	第2回弘前市社会教育委員会議
開 催 年 月 日	令和6年2月20日（火）
開 始 ・ 終 了 時 刻	午後2時から午後4時まで
開 催 場 所	岩木庁舎 2階 会議室4
議 長 等 の 氏 名	委員長 生島 美和
出 席 者	生島 美和 委員長・佐藤 義光 副委員長 三上 文章 委員 ・古川 和生 委員・川越 俊昭 委員 越村 康英 委員 ・白藤 隆士 委員・中田 早樹子 委員
欠 席 者	成田 むつ子 委員、鈴木 純子 委員
事 務 局 職 員 の 職 氏 名	生涯学習課長 原 直美 中央公民館長 中川 元伸 博物館長兼高岡の森弘前藩歴史館長 熊谷 義昭 文化財課埋蔵文化財係長 蔦川 貴祥 生涯学習課長補佐 山崎 宏 中央公民館岩木館長 高森 紀之 中央公民館相馬館長 澤田 明人 図書館・郷土文学館運営推進室長 山田 俊一 生涯学習課企画係長 竹原 正澄 生涯学習課主査 金原 崇志 生涯学習課主事 田地野 智和
会 議 の 議 題	案件等 ① 子どもクラブの実施状況について ② 令和6年度社会教育事業について ③ 令和6年度社会教育関係団体補助金について その他 ・令和6年度東北地区社会教育研究大会開催について ・弘前市社会教育委員関係スケジュールについて
会 議 結 果	・「会議の議題」にもとづき説明し、各委員からの質問や意見を伺った。

<p>会議資料の名称</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・会議次第 ・子どもクラブの実施状況について ・令和6年度弘前の社会教育（案） ・令和6年度社会教育関係団体に対する補助事業一覧 ・令和6年度東北地区社会教育研究大会開催に係る協賛金の募集について ・弘前市社会教育委員関係のスケジュール（予定） ・文化財課資料
<p>会議内容</p> <p>（発言者、 発言内容、 審議経過、 結論等）</p>	<p>○第2回社会教育委員会議</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 委員長挨拶 3 会議 4 閉会 <p>~~~~~</p> <p>会議</p> <p>（議長）</p> <p>次第3（1）定足数の確認</p> <p>次第3（2）会議録の署名者指名 署名委員は三上委員と中田委員を指名</p> <p>次第3（3） 案件①子どもクラブの実施状況について 事務局より説明 （事務局より子どもクラブの実施状況について報告）</p> <p>（議長）</p> <p>これにつきまして皆様方からご意見、ご質問を頂きたいと思っておりますがいかがでしょうか。子どもクラブといたしましては長く実施しているものであります。一つ一つの講座については様々工夫をして頂いているとは思いますが、子ども達の体験学習の参加については是非ご意見、ご質問頂ければと思います。</p> <p>（三上委員）</p> <p>学校現場にいますと、こういう案内を頂いて子ども達に配布させてもらっていますが、この活動のみならずいろんなチラシが配られている中でどうも子ども達の参加意欲が感じられない状況にあるなど見えています。クラブ活動、スポーツ活動等に行っている子ども達はいいので</p>

すが、それ以外の子ども達が家から出ていない状況はどのように見えているのでしょうか。

(中央公民館長)

チラシにつきましては、学校の方にご協力いただいて児童生徒全員に配るものからポスターまでお願いをしております。子どもクラブに関しましては、ほぼ定員に達しまして同程度か同等以上に来ていますので、こちらの受けることが出来る人数に関しては実際バランスが取れているかと思えます。ただ、それ以外のお子さんで興味を示していないのかなという事も感じております。令和3年度だったと思うのですが、この会議の中で継続的な講座であればなかなか参加しにくいという事で単発の講座もやっていただきたいとの要望を受けましてやってみたのですが、あまり反応が良くなかったのかなと思いました。去年は女子児童生徒向きじゃないかという事で男子児童生徒が興味を持つものをやってはいかがかというようなアドバイスを頂いております。今回は手芸というよりもカルトナージュなど工物的な物を取り入れて様子を見てみたいなと思っております。以上です。

(越村委員)

参加者の声を紹介頂きましたけれども、その声を聞く限り本当に豊かな体験学習の機会になっているという事を改めて感じております。公民館職員の皆さんの影での働きかけ、工夫もあるのだろうなと思ながら伺っておりました。一点質問なのですが、自然観察クラブは非常に人気があるという事で半分以上のお子さんが抽選に漏れているという報告がありました。公民館としては、子どもクラブ以外の事業をご紹介いただいても大事だなと思っていたのですが、抽選の仕方は工夫があるのか、毎回無作為に抽選するのか、例えば前年度参加出来たお子さんは一回休みとか、より多くの子どもが参加出来るような何か配慮があるのかという事を一点お聞きしたいと思いました。それと、先ほど三上委員がおっしゃった子どもの参加意欲に関わる事なのですが、例えば学校の担任の先生がチラシを配る時に一声掛けていただくかどうかという所も子どもの意欲を掘り起こす時に大きな働きかけになるのかと思っております。単にチラシを配るだけではなく何かそこに一つ声を添えて頂けるとまた変わってくる部分があるのかなと思っております。以上です。

(議長)

ありがとうございます。学校の先生方には是非そういったお声がけしていただくというの、それこそ地域学校協働活動という所につながっ

てくるのかと思います。ご質問について公民館いかがでしょうか。

(中央公民館長)

抽選の方法についての配慮という事なのですが、出来れば継続して参加するのが望ましいクラブもあれば単発でもいいと思うクラブもあります。自然観察クラブに関しましては、単発でも継続しなくても1年度参加でもいいという事で無作為に抽選しております。ただ、兄弟で参加している方があればその辺りは配慮しております。以上です。

(議長)

補助事業という側面もあると思いますけども、それがもしも切れてしまった時に終わりにはして欲しくないという話を伺いながら思います。その意味で自立的に出来るような体制も是非模索して頂きながら進めていって頂ければと思います。

~~~~~

案件② 令和6年度社会教育事業について

(事務局より令和6年度社会教育事業について説明)

**(議長)**

私の方から一つ質問です。全体的に見ますと、子どもの事業の比率が非常に大きいと感じます。もちろん青少年の社会教育というものも重要なところではあるかと思うのですが、一方で社会教育における学びというのは子どもだけではなくて大人の学び、高齢者の学びというものもフォローしていく事が必要だと思います。先般公民館の職員の方々とも関わらせていただきましたけれども、地域における担い手、様々な場面での担い手が不足しているという事はいろんな形で伺うことが多いです。そうした時にこういった担い手を育てていくという事も社会教育の重要な役割でもあるし、そういった自主性というのを育てていく環境をいかにつくっていくかということがこういう行政の中でやっていかなければいけない所だと思います。その意味で、例えば文化財の事に対して関心を持ってくれる人を増やすだけでなく、担い手として自分たちのものだという事を意識して、なんならガイドまで担っていくような学びの機会をいかに育てていくかとか。公民館において今言われている、例えばSDGsについての現代的な学びであるとか。先般市長さんも「ゼロカーボンを目指していく」とおっしゃっていましたが、ではゼロカーボンを目指していくということを市民レベルでどういうふうに行っていくか、学びをいかにつくっていくか、公民館などでもそういった事を発信していく必要があるのではないかと思います。ちょっとそのようなビジョンというのがあまり感じられ

ないように見受けられる節があります。その辺を特に公民館などではいかにお考えかを伺えればと思うのですけれども。いかがでしょうか。

**(中央公民館長)**

担い手に関しましては、中央公民館の講座も子ども向けの比率が多いとは思いますが、この中で弘前大学との地域づくり連携事業というのがありまして、タイトルは一つですけれどもこの中に様々な講座とか内容が入っています。例えば地域未来創生塾というのがありまして、様々なテーマを毎回作って今年度5回くらいやっているのですけど、歴史に係ることや弘前ならリンゴの話とかそういう大人向けの講座もやっています。それから市民講座、現代セミナーがあり、こちらは大人向けの講座で、津軽塗の映画があったのでそれについての講座、それからリンゴとシードルの関係の講座も実施しております。子どもリーダー養成事業も、大人になった時に弘前市のリーダーになってもらいたいという事で実施している事業ですので、この辺を進めていきたいと思っております。それから、地区公民館の職員にも声をかけまして、実際中央公民館でやっている講座に来て頂いて、それを地域に戻って活かしてもらおうといったそういう取組もしております。先ほどありましたSDGsの関係なのですが、確かにこれからはSDGsに関する講座も企画していけたらと思っております。ただ私の方でもどのような形のSDGsの講座がいいのかわからないので、もし生島先生や委員の方からアドバイスがあれば、それを活かして現代セミナーとかそういう部分で市民に発信出来ればと思っておりますのでご協力をお願いしたいと思います。私からは以上です。

**(議長)**

要するに期待する事は、講座として市民が受け止める講座ばかりではなくて、是非市民主体で何かを作っていくような、そういう力を育める道筋が出来るものがもう少し企画されていくといいなと思います。また、子ども向けの事業であったとしてもその背後で地域の方々がそれを支えていくということや、子ども達が成長、発達していく中で担い手になっていくというビジョンもあると思います。

もう一つ提案としては、公民館の今ある弘前の社会教育の紙面の落とし方です。全部講座で何をやっているかという聞き方になっていて、もっとここで子ども向けにしているのだけど関係団体にこういう人達がいいますよとか、公民館だけでやっているのではなくこういう団体にも支えられている、一緒にやっている、そういう事が明示化されてくるとその人達への視点というのももっと出てくると思います。そういうフォーマット自体を変えていきながら学習をより効果的に見せていくと

いう事をしてもいいのではないかと思います。おそらくこのフォーマットは20年位変わっていないのではないかと思いますので、例えば地区公民館に関して青少年講座や高齢者講座、分断的になっているけれども、もっと連携して重層的にやっているかと思っておりますのでそういうことも記載するのも必要なのではないかと考えておりました。

**(中田委員)**

今生島委員長がおっしゃった通りだなと本当に思いました。公民館の事業や生涯学習課の事業など、ある程度枠組みがもうされていて、その中で毎年同じ活動を取りあえず今年もやりました、参加者何人でした、感想はこうでしたではなくこの活動が一体何のためにあるのかという所に着眼するとやはり時代と共に変わっていく所はあると思うのですよね。コロナ禍前に活動を戻さなければいけないという文面がどこかにあったかと思うのですが、コロナ禍前に戻すのかなという所を感じました。コロナがあったからこそ出来なかった事とか、その中で省いてもいいのではないかという所だとか、本当に必要な活動の形態が違ってくると思いますし、確かに子どもの活動も多いのですが今子ども達は忙しいですよね。やっぱり土曜日とか日曜日、部活や習い事で忙しくて、保護者も共働きが本当に多いのでなかなか子どもに何かを体験させたいという時間が各家庭では持てないのではないかという所を市の行政のイベントとかに参加するとか、そうして子ども達が作り上げていく事というのがすごく大事だと感じています。例えば東部では、子どもの祭典などで中学生が当日たくさん集まって自主的に何をやりますかって、何かやる事があったら言ってくださいってすごく動いてくれるのですが、決められた枠の中でやっているという感じです。例えば中学生の目線から見て小学生が喜ぶ事ってどんな事だろうと考えて1から作っていくとか、そういった体験などが出来たらいいのかなとも考えたのですが、やっぱり子ども達は忙しいというところとか。あとは小学生とかはチラシを配られても出さないです。気が付いた時には「もう終わっているじゃないの」とか、そういう事もあるので広報の仕方の工夫をしてみるのもいいのかなと感じました。気になったのはボランティアサークル虹の会ピュアフレンズの所です。ここのボランティアスタッフが減少されているという事で、私もこういうボランティアに興味があるので是非参加してみたい、どういった事を当事者が困っているのか、ボランティアの方達がどういった事を課題としているのか、そういう所も実際にお聞きしてみたいと感じました。11ページの高岡の森の他館との連携という所で、博物館やれんが倉庫美術館と連携しながら、バスで市内の小・中学生を観覧館とを送迎する事

業を実施し学習機会の充実を図るという所がありましたけれども、公共のバスや弘南鉄道の券などが市内の小・中学生に配布されたかと思うのですが、もう少し早く春先とかに配布されていればもっと活用されたのではないかなと思います。10月や11月よりは夏休みや気候のいい時期に家族で出かける、バスを使って岩木山の方に行ってみるとかそういった事を経験する機会にも繋がったのではないかなと思うので、連携も進めていただきたいと感じました。あと大森勝山遺跡の方ですね。前年度古川委員から話があったかと思うのですが、トイレの設置とかそういった所。確か市議会の方でも取りあげられていたかと思うのですが、令和8年度から使用開始ということで結構かかるものなのですね。整備とかすごく大変だと思うのですが、ガイドさん達も結構大変な思いをされている事を市議会でも取りあげられた時にお聞きしましたので、設備が着手されるという事で本当に良かったと思います。親子で日曜日にでも、弘前に沢山いい所があるのでそこを再確認、再発見する機会になればというふうに、公民館の事業もそうですけど、皆が自発的、自主的に学習する機会が与えられればと思います。以上です。

**(議長)**

コメントとして、ご意見として受け止めさせていただいてもよろしいでしょうか。

**(佐藤委員)**

先ほど講座は子ども中心のものが多いという事で、成人向けとして例えば精神の健康のための講座というものを取り入れていただきたい。というのも、先日市の教育創生市民会議に参加しましたら私も驚いたのですが、30代40代の死亡例の上位に自死がありました。そういう意味では、例えば市民講座や地区公民館で、精神の健康増進といったテーマで、フォローするにはどういうふうにしていったらいいか周知することや、あるいは保険、福祉、医療との連携とかが必要だと思います。やはり30代40代というと本来であれば仕事が一番伸び盛りで夢膨らんでいる世代なのに、そういう事がございますから、30代40代の親御さん達を対象にしてもいいし、この年代の方を対象にしてもいいですし、あるいはその職場の上司とかを対象にした講座でもよいでしょうが、そういう講座もあればより一層弘前市が明るくなっていくのかなと思いました。以上です。

**(中田委員)**

佐藤委員の話をお聞きして本当に感じた事なのですけども、事業の中にはどうしてもキラキラした場所、イベントという盛り上がるイベン

トというところが多いのかなと思ひまして。やはり居場所のない人達というのはいらぬと思うのですよね。そういった人達が集まれるような取り組みもあつてもいいと感じました。自死の問題もそうですし、私もちょっと不登校の問題にも今関わつていまして、9月1日問題というのがありまして、その時期が子どもの自死がすごく多く、東北は夏休みがもっと早く明けるともう少し早いのですが、全国的に一番多いのが9月1日なのですよね。ただ年間を通して子ども達の自殺率が低くなる時期というのがいつなのかなと見てみたら夏休みに入つてすぐのお盆前の辺りまで、それから年末年始。やはり家族に支えられて自分の安心できる居場所がある、自分を確認できる場所があるという時に子ども達が気持ちをセーブできるのかなというふうに考えていますが、それを支える親も大変ですよね。実際に子どもだけではなく、鬱などにかかつてしまった場合に、本人も辛いですが、寄り添つてサポートしていく周りの家族とか関係する人達も本当に心を痛めていると思ひます。そういった方達が何か救われる場所がないかという所を、私も具体的に何がどうというのが今すぐお話できないですけども、これから考えていきたいと思つておりますのでお力をお借りできればと思ひます。以上です。

#### (古川委員)

今の例えば中田委員のお話にあつたように、多様な子ども達に対応するために学校は学校として頑張つている訳なのですが、今学校も忙しい中で毎日過ごしております。ですから、地域の手を借りてコミュニティスクールという事で見えていきますと赤字で記載されており新しくなつた部分ととらえております。また、この資料の1ページを見ますと地域コミュニティの活性化でコミュニティスクールの推進と打ち出しているのですが、私の記憶からすると、打ち出した頃に比べるとコロナもあつたからだとは思ひますが、随分トーンダウンしているというやうな印象があります。ここでこうやつて書いたという事は公民館の方が主導でまた何か始めていくのかどうか、もしこれを推進するのであれば具体的に何課がどのようなことを行うのか、勉強のために教えていただければと思つております。以上です。

#### (白藤委員)

まず、先ほどから各担当者から説明がありまして、膨大な量の講座・イベントをやつているという事を本当に肌身に感じましたが、現状としてスタッフはどのくらいの人数でどういふ計画できちんとやれているものなのか、維持されているのかということをお聞きしたいと思つておりました。もう一つは、先ほど生島委員長の方からもフォーマットに

ついてお話がありましたけれども、やはり時代と共に変化していく訳ですので、何かしらここで1回リセットしなければただ進んでこういった会議の場で意見を言ったとしてもそのまま終わってしまうという事になってしまいかねませんのでこれはどうなのでしょうかね。生涯学習課の下に今のいろんな業種があるというのであれば、誰かが主体となって動かなければなかなかこの形は変わらずにずっと同じように来年も次の年もとなってしまうような気がします。私は公募の社会教育委員でございましたけど、2年間務めさせていただき本当にいい勉強になりました。最後に、是非今の佐藤委員の話じゃございませんけれども、今の状況になってくるとやはり地域の専門家の方と連携してやっていくという事が大事で今後模索して欲しいと思います。そのためには誰かが音頭を取らなければだめで、その主体が生涯学習課なのであれば、そういったものをこういう会議の場に挙げて初めて議論されて形になっていくのかなという気がしております。以上でございます。

#### (川越委員)

資料の4ページをご覧になっていただきたい。この上に子どもの活動推進事業や弘前市子どもの祭典支援事業などがございます。私は青少年育成委員会に深く携わってまして、令和5年度は子どもを育成する事業に対して補助が多くあったという事で非常にうれしく思っています。また、子どもの祭典ですけれども、これにも私達青少年育成委員は全面的に協力しているのですが、子ども達が本当に楽しい時間を過ごしているのだなと思っています。地域全体で子ども達を守っていく事が、やはり地域活性化というか、子ども達のコミュニティ、繋がりが深まっていく事によって子ども達の健全育成が深まっていくのではないのかと思っています。勉強もスポーツも大切ですが、やはり遊びを通しての社会教育、これも非常に大事ではないかいつも思っている事です。簡単ですけども私の意見でございます。

#### (三上委員)

子ども達の教育に携わってきた身として、本当に子ども達の元気がない、自己肯定感が低い、どうしたらいいものかとずっとずっと考えてきました。教育の面で出来る事は何かのと同じように、もしかしたら今こそ考えなきゃいけないのは子ども達も含めて保護者、大人もそうなのですけれども、大人の低年齢化という事が叫ばれている今でもありますし、やはりこう大人も前向きに生きるためにはどうしたらいいとか、その辺りをこれから社会教育、学校教育の面で本当に考えていかなければならないと思います。先ほどの自死うんぬん等々も皆関係ある

と思うのですね。今本校においては、とにかく学校は楽しい所じゃなきゃいけないだろうと、居場所がある所じゃなきゃいけないだろうという事で従来の教室で教師が勉強ってこういうものだ、こうしてやりなさい、ああしてやりなさいという授業から脱皮して、まずは子どもと我々教師の信頼関係を結ぶところからの学級経営をもう一度勉強しなおそうと。初任者研修で学級経営を学んだきり一国一城の主であしなさい、こうしなさいと上から目線で子ども達に指導した先生もいたかもしれません。言葉の暴力的な指導している人もいるかもしれません。そんな中でももっとも子ども達に寄り添う。でも寄り添うって実は難しい事で、自分がどれだけ小さい頃から親以外の大人から寄り添われてきたか、愛されてきたか、その蓄積がどれだけ人を愛せるようになるかと同じだと見ています。そういう意味では、言葉を変えると愛されてきた分だけしか人を愛せないという事をこの30数年の間で感じてきていて、だとしたら今我々が出来るのは子ども達を愛してあげる事だろうと。もっと具体的に言うと「めごがってあげる」事だろうという事で、今子ども達をとにかくめごがって信頼関係を結んで、先生が好き、先生は僕を成長させてくれそうだと期待感が持てるようなそういう信頼関係を持ったうえで話をしていく、授業をしていくとなると子ども達は笑顔も増えてきますし自己肯定感も上がってきます。実際に今年度1年間で子ども達の意識がどんどん変わってきて、そして笑顔になっている時間も多くなってきているというデータもちゃんと出てきました。そういう意味では学校もそういう形で変わっていく、そして、社会教育の面で大人と一緒に変わっていく、自己肯定感を高めていくという社会教育とはどうあればいいのかを考えていく必要があると思いつながら今聞かせていただいたところでした。以上です。

#### **(越村委員)**

今委員の皆さんがご発言された事、とても大事な事ばかりだと思いつながらお話を伺っておりました。ここで話された事が一つでも二つでも具体的な取組として実を結んでいくといいなと切に願っています。ただ計画があり、この事業の枠組みの中で予算がつき、それに基づいて事業を動かしていくといった時に、職員の皆さんはなかなか自分のカラーを出して新しくという事は難しいような状況もあるのかなと推察しました。ただ、一つ一つの事業の中でどれだけ余白の部分というか、隙間の部分を豊かに作り出していったら、その中で新しいチャレンジの一つでも二つでも挟みこんでいけるような、そういう体制を整えていくという事が現状を動かしていく時には大事になるのかなと思いつながら聞いておりました。地域の方が抱えている切実な課題や直面している困難などそういった所に向き合って、それを支えられるような社会

教育事業をつくっていくという事がコロナ後のこれからは求められている大事な事なのではないかと思えます。先ほど中田委員がコロナ前に戻すだけでいいのかというご発言されましたが私も全く同感です。社会は絶対にコロナ前には同じようには戻らないので、そういった中で社会教育事業のあり方というものもコロナ後の新しい社会を見据えながら動いていくべきではないかと思えます。繰り返しになりますが、そういう中で余白の部分の一つ一つ既存の事業の中に作り出していつて少しずつ状況を変えていく、新しい取り組みを作り出していくという事が大事なかなと思ひながら話を伺っておりました。

**(議長)**

本当に様々な視点から職員の視点であるとか事業づくりの事、さらには親子、地域そして人間観、そういった様々な視点からご発言頂けたかと思ひます。教育委員会の方から質問に答える形で何点かあるかと思ひますけど生涯学習課の方でよろしいでしょうか。人材的な事を少しご紹介頂ければと思ひましたがいかがでしょうか。

**(生涯学習課長)**

人材というのは人数ではなくてという事ですかね。

**(生島委員長)**

人数をお話頂いてもいいと思ひますけども。どうでしょう、白藤委員。

**(白藤委員)**

代表の館長さんや課長さんが来ておりますけれども、どのくらいの人数でこういった事業が運営されているのか全然わからないものですから。このくらいの人数でやっていますよとかどうなのかなと思ひまして。

**(議長)**

わかりました、人数ですね。

**(生涯学習課長)**

生涯学習課、文化財課、中央公民館、博物館、高岡の森というふうになりますと少しお待ちください。

**(議長)**

今計算していただいている間に、その中には司書の方がいたり学芸員

が当然いたり、またはそうは言っても豊かにすごく充実して人材がいるという訳ではなく、本当に地区公民館ですと囑託でボランティアのような形で職員が働いてくださっている所もあるかと思えます。計算が出たようですけども。お願いいたします。

**(生涯学習課長)**

地区公民館の会計年度任用職員さん等も含め、生涯学習課、中央公民館、博物館、高岡の森まで含めると約 180 人くらいです。図書館については指定管理になりますので、さらにその他指定管理の職員が働いているという事になりますので人数としては多いのですが、働き方というか職員の身分についてはやはり多様になっているところでございます。

**(白藤委員)**

例えば公民館は随分いろんな事業をなさっていましたが、実際この事業をするのにどのくらいの人数が動いているものなのかと思っておりますね。もう十分足りているのかそうじゃないのか、その辺はどういう状況なのかなと思ひまして。

**(中央公民館長)**

中央公民館に関しましては私を含めて職員が 17 名です。そのうち会計年度任用職員が 3 名、あとはいわゆる事業とは別に庶務関係をやっている職員も 4 名いますので、実質生涯学習の講座などを担当している者はプラネタリウムも含めまして 12 名で対応しております。プラス、地区公民館に関しましては先ほど生島委員からもあったのですが、館長、事務長各指導員約 70 名で、12 地区公民館でありますけれども、その方たちは仕事ができる時間に制限があります。このほかに岩木館、相馬館もありますけれども、どこも事業をとにかく企画して運営して終わったら後始末、様々あるのでそれがほぼ毎日繰り返されているというような状況です。

**(白藤委員)**

そうであるならばなおさらのこと、そのまま引きずるのではなくて、一回見直しかけて十分に時間をとれるような職員の配置というのを考えていかなければなかなか続いていかないのかなという気もします。一意見でしかありませんけれどもそういうふう感じた次第です。

**(生涯学習課長)**

コミュニティスクールの推進につきましては、従前から行われている

ものでございまして今回特出して記載したものではありません。表記を直したものです。ただ、学校だけでなく、地域総がかりで子どもたちに関わっていかなければならないというのは弘前市教育委員会としては以前より考えていることですので、これからもいろいろなかたちで学校と一緒に地域総がかりで子どもたちを育てていく環境づくりというのは考えていきたいと思っているところです。以上です。

~~~~~

案件③ 令和6年度社会教育関係団体補助金について

(事務局より令和6年度社会教育関係団体補助金について説明)

(議長)

この件については、社会教育委員の意見を聞くということになっておりますので皆さんいかがでしょうか。前回の議論で団体に対して出す補助金についてここで意見を言うというようなところであって、適する資料と適する議論をしていく必要があるのではないかとということで今回は3団体に関してご意見をいただくということです。

(中田委員)

今回この3団体で一番上のガールスカウト弘前地区委員会事業費補助金ということで、大会に参加するための参加費と旅費の一部を補助金として交付するということですが、これはガールスカウトなので子どもが主に活動していて、そこに大人が補助員として入っている形になるかと思えますけれども、こういった団体に対する補助金というのは、前にも聞いたかと思えますけれども公募はされていますか。

(事務局)

この補助金に関しては公募ということにはなっていません。前年度等を鑑みて必要経費等についてはそれぞれ団体等に調査するということはありますけれども、助成が必要ないところもありますので、全部の団体に対して公募をしているものではございません。また、この補助金は、枠があるということではなくて、あくまでも団体にそれぞれに判断するものなので市内の全団体に調査して交付するという種類の補助金ではないものでございます。

(中田委員)

部活動ですね、小学校はもうスポーツ少年団になっております。中学校も部活動が地域移行されるなかで学校からの補助金がこれまでどおりではなくなってくるころがあります。スポーツ団体だけではなく文化活動についても個々の負担が大きくなっていくところがありまし

て、ガールスカウトに補助金が出ているというところで、もし補助金の対象が広げられる可能性があるのであれば、ほかにもこういった補助金を受けたいと思うところがあるのではないかとということをご提案したいと思います。この3団体に関しては特にお話しすることはないのですけれども、今後の展望というかとそういうところでお願いしたいなと思っています。

(議長)

事務局、今の意見についてありますでしょうか。

(事務局)

今回お渡ししているのは社会教育関係団体に対する補助で3つの補助金なのですが、小・中学校の運動や文化活動ですね。吹奏楽や合唱などの部活動で、県大会や全国大会に出場した際の補助などは社会教育関係団体とは別になりますので別の補助金がございます。それについてはまた改めてご説明させていただければと思います。

(議長)

団体に補助を出すことについて不当な支配にならないかということの確認ということで、すみません、先にそれをお伝えしておけばよかったのですけれども。ただこの団体だけなのかということのところはいつも課題になるところで、むしろこういった自立的な活動を支援していくということの意味でもですね、様々な見方をもう少し豊かにしていくことが必要なのではないかというのが持ち越しの課題にはなっておりますので、その辺も継続的に見つめていく必要があると思います。先ほどより話がありますように、前例踏襲ばかりではなくて新しい動きというものもありますので、そういった形をどのようにフォローしていくのかということをもっと検討していく必要があるだろうと皆さん方も今後注視していただければと思います。では補助金につきましてはよろしいでしょうか。ありがとうございます。

では、その他の案件に移りたいと思います。令和6年度東北社会教育研究大会の開催につきまして、事務局よりご報告をお願いいたします。

(事務局)

(事務局から令和6年度東北社会教育研究大会の開催について報告)

(事務局)

(事務局から弘前市社会教育委員の関係スケジュールについて説明)

	<p>(議長)</p> <p>本日の会議の案件報告、その他にしましては終了いたしました。</p> <p>~~~~~</p> <p>(事務局)</p> <p>では、これもちまして令和5年度第2回弘前市社会教育委員会議を閉会いたします。本日は大変お疲れ様でした。ありがとうございました。</p> <p>閉会</p>
<p>その他必要事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会議は公開 ・ 傍聴者なし